

# みんなの童話

## どうぶつ村は大さわぎ



町のはずれに、こんもりした森が、あります。町の人たちも、よくさんほにでかける森です。

森には、いろいろなどうぶつが、すんでいます。

お日様が、にこにこでてきて、あたたかくなってきました。

のねずみかあさんも、大忙しです。赤ちゃんが、五ひきも生まれたのですから。ミルクをほしがる子、あばれてベッドからおちる子、大なきてかあさんをよぶ子。それはそれは、たいへんなさわぎです。今日も、のねずみかあさんは、たべものをさがしにでかけました。その途中のことです。草の中になにか、くさいものが、うずくまっています。

「のねずみかあさんは、大びっくりしました。(ねー!)」

「くろいものは、ジーツとして動きません。」

「のねずみかあさんは、おそろおそろ近よりました。それでも、くろいものは、動きません。」

「かあさんが、よく見るとそれは、ふわふわの毛糸であんだあつたかそつな帽子でした。」

「(やれ やれ)ほつとしたかあさんは、その帽子を、もつてかえることにしました。よいしょ よいしょと、ひっぱりかけたその時、」

「その帽子、わたしが先に見つけたんだから」

「木から、りすかあさんがおりてきていいました。」

「いやーね。わたしが先に見つけたのよ」

「いいえ。わたしのほうが先よ。木の上で見つけたんだから」

「二ひきのかあさんは、いいあらそいをはじめました。」

「なんだ、なんだ」

「さわぎをきいて、うさぎとうさなが、でてきました。」

「一寸きいてくださいよ。わたし

が、先に見つけたんだから」

「いいえ。わたしが先なんだから」

「二ひきのかあさんは、どちらもゆずりません。話をきいたうさぎとうさなは、」

「それなら、じゃんけんできめれば」と、知恵をだしてくれました。

「じゃんけんなんて、とんでもない。わたし どうしても欲しいから」

「いいえ。わたしのほうが、もつともつと欲しいの。じゃんけんでは、きめられないわ」

「あらそいは、おさまりません。そこへ、きつねじいさんが、」

「わたしが、きめてあげよう」と、声をかけました。

「そつした時は、子どもの多いかあさんがもらえばよい」

「と、いいました。」

「わたし、赤ちゃんのベッドにするつもりよ」

「のねずみかあさんは、いいました。」

「子どものボールあそびにつかう」元気な声で、りすかあさんが答えました。

「これをきいたきつねじいさんが、」

「お子は何匹かな、かあさんたちと、ききました。」

「わたしの赤ちゃんは、五ひきよのねずみかあさんがいいました。」

「うちは、かわいい子が二ひきよ

りすかあさんも、答えます。「五ひく二は三か。それでは、この帽子はのねずみかあさんが、もらえばいいわけだ」

きつねじいさんが、答えをだしました。

「ちようどそのとき、蜂蜜を集めていたくまばあさんが、通りかかり、みんなのところへきました。」

「いい帽子だね」と、手にとつて見ていましたが、

「わたしも欲しいよ。でもねえ、一番欲しいのは、おとした人ではないかしらねえ。一日か二日そこに置いとくのは、どうかねえ」と、いいました。

森一番のもののしりの、くまばあさんの話をきいて、みんなは、それもそうだと思いました。

りすかあさんも、のねずみかあさんもあきらめました。

次の日、人間のおばあさんがやってきて、帽子を見つけると、

「おやおや。こんな所におとしていったのね。まあ、まあ」と、帽子をひろい、枯れ草をはらつと

「よかつた、よかつた」と、帽子をかぶつてかえりました。

しろやま会員 片山 直子